古典語ノート（五）

―「つれづれ」の源流 3―

清水文雄

8

「つれづれ」の源流時代の考察を終えるにあたり、一、二のことをつけ加えておくことにする。

まず、「つれづれ」に関連のある語とされる「つらつら」について考えてみたい。「つらつら」は、「つれづれ」と違いすでに上代からその用例が見えている。

新撰字鏡を見ると、「瞋」の意義を「熟視也」と規定し、和訓として「豆良豆良弥留」をあてている。また類聚名義抄では「倩」の文字を「ツラツラ」と読ませている。唐の張文成の作である遊仙窟に見える「熟視」「細見」の文字が、古くからともに「ツラツラミル」と読みならわされているばかりでなく、日本書紀でも、すでに「究見」「熟視」に同様の訓が与えられているところからすると、「つらつら」は、主として「みる」という動詞の上につけて用いられていたようである。そういえば、万葉集に見える三つの用例の「つらつらに」も、すべて「見る」という動詞をその下に伴っている。すなわち、大宝元年九月に、持統天皇（太上天皇）が紀伊の国に御幸されたときに、坂門人足が作ったという歌は、

巨勢山の列々椿都良都良爾見つつ思はな巨勢の春野を（巻一、五四）

となっている。また「或本の歌」として、

川上の列々椿都良都良爾見れども飽かず巨勢の春野は（同、五六）

と出ており、この方は作者が春日蔵首老となっている。もう一例は、兵部少輔大伴家持が、兵部大丞大原真人今城の宅の宴に招かれたときに、庭に植えられた椿に属けて作った歌であるが、それは、

あしひきの八尾の椿都良都良爾見とも飽かめや植ゑにける君（巻二十、四四八一）

となっている。

この三首に見える「つらつらに」は、すべて大言海の言っているように、

念ヲ入レ、押シ究メテ。細カニ、其全体ヲ見、又、思ウテ。ヨクヨク。ネンゴロニ。ツクヅク。

の意味で用いられているといってよい。なお、大言海は例によって語源説をかかげているが、それによると、「連連（ツラツラ）ノ義、絶エズ続キ

テノ意」ということになる。つまりこの「つらつら」には、本来動作の「連続」の意がこめられていると見られるわけである。しかも、これらの用例がすべて、「見る」を伴って「熟視」の意で用いられているところからすると、具体的には見る作用の「連続」を意味するとともに、見る度合の「精密」をも意味するものと思われる。さらにここで注意すべきは、「つらつら」もしくは「つらつらに」は、ともに「見る」対象がはっきりしている場合に限られているということである。言いかえれば、主体の立ち向かう対象が明瞭に存在する場合に限られているということである。

ここでひるがえって、「つれづれ」についての大言海の説明を聞いてみることにしたい。大言海はここでも最初に語源説をかかげて、「連連ノ義ニテ、思ヒ続クル意カ、或ハ、つらつら（熟）ト同意カ」としている。「つれづれ」と「つらつら」が同意であるとは、単純にはいえないとしても、少くとも、「つら」と「つれ」がともに「連続」の意を持ち、語源を同じくすることは、まちがいないものとみてよかろう。そうすると、大言海が控え目に指摘しているように、「つれづれ」は「思ヒ続クル意」となるとともに、「つらつら」とも無縁でないことになる。

つぎに、「つれづれ」の意味として、

㈠独リ物ヲ思ヒツヅケテ、ナガメテアルコト。

㈡転ジテ、独リ事ナクシテ、淋シキコト。空シクシテ居ルコト。スベキワザナクシテ、ヒマナコト。徒然。

の二義をあげている。この説明には、前々号で引用した明解古語辞典ほど明晰な分析は見えないが、語源説は別としても、とくに㈠に見られる説明は、この語の第一義の規定として、より深切なものがあると思われる。この㈠の用例として、大言海は古今集に入るつぎの歌をあげている。

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふ由もなし（恋三、六一七）

「つれづれ」が「ながめ」につづいてゆく用法は、平安時代を通じて、とくに女流の作品にしばしば見られるところである。ここの「ながめ」は「長雨」をかけた名詞形として用いられているが、これは動詞形としての「ながむ」から出たものと考えられる。「ながむ」は、物思いのポーズをあらわす語として、うつろな視線を外界に向けながら、物を思いつづける意味で用いられている。動詞形としては、たとえば、「いとかくつれづれになが め給ふらんを云々」（和泉式部日記）のように用いられる。そこから、

つらつら（つらつらに）見る

つれづれと（つれづれに）ながむ

の二つの類型が生まれてくる。今この両者を比較してみるとき、「つらつら」と「つれづれ」に、ある一貫した意味のあることは明らかであるが、同時に異なった意味をも認めることができるのである。一貫したものとは、「連続」の意味であり、その点からいうと、「つれづれ」は「つらつら（熟）ト同意カ」と一応疑問をのこしているとはいえ、大言海の説はあたっていることになる。また異なったものというのは、前者においては、主体が対象を明瞭に認めたうえで、その対象をより精確に把握しようとする能動的な態度が見られるのに対して、後者においては、そのような対象は初めから認められておらず、いわば無対象の不安にさらされた主体の心身の孤独な状態が見られるということである。前者では、主体の志向する

対象が確認されているのに対して、後者では、主体はその志向する特定の対象を持たないままで、精神はいたずらに彷徨をくり返すにすぎない。したがって、「つれづれ」と「つらつら」の相違は、それらにつづく語としての「見る」と「ながむ」との相違に対応するものと考えられる。もっとも、

つれづれと空ぞみらるる思ふ人天降りこむものならなくに（和泉式部歌集）

のような用例も見えるが、これは「つれづれとみる」ではなく、「つれづれとみらるる」の形をとったもので、焦点の結ばれようのない視線が、天空に向かって漫然とそそがれているのである。そこには、主体の能動的な志向の代りに、主体の自然的な状態が見られるにすぎない。その点、「つれづれとながむ」の系列に入るものといってよい。

9

唐木順三氏の近著『無常』には、自身の還暦の心懐も託されているようで、氏の数々の著作のなかでも、とりわけ深い感銘をもって読了することができた。この本は、「はかなし」ということばのふくんでいる王朝的な心理と情緒が、王朝末期から中世へかけて、「無常」に急傾斜してゆくプロセスを跡づけることを目標として書かれたものである。つまり、王朝の「はかなし」から中世の「無常」へと流れてゆく文芸・思想の歴史を主題としていることになる。私は「つれづれ」と「はかなし」という、どちらも平安時代になって初めてあらわれたことばの文学史的意義を重視し、両者の意味を関連的にとらえることを、最近の課題の一つとしている関係から、右の問題設定には多大の関心をもつものである。唐木氏の見せてくれた「はかなし→無常」の図式も私なりに描いていたのであるが、さらにこれを発展させて、この図式に対応するものが、「つれづれ」の場合にも見られるかと反問してみるとき、そういうものは見られないというのが今のところの見通しである。それはこの二つのことばの発生当初から、それぞれに具わった特性の然らしめるところと考えられる。「はかなし」の源流時代の形態と意義についてのささやかな考察は、未完ではあるが最近出た「国文学攷」（第三十三号）に載せておいたから、詳細はその方にゆずるとして、以後の考察にもかかわるところがあるので、ここで「はかなし」と「つれづれ」との関係に、少しばかりふれておくことにしたい。

時代と個人を通じて一貫する「つれづれ」の意義として、「孤独感」がある、という意味のことを前々号で述べた。これをもう少し詳しくいうと、主体が、かかわるべき用事も相手もなく、外界から隔絶した「孤独」な状態にあるとするのは、主体の状態の客観的把握であるが、ひとたび自己凝視によって、みずからが「孤独」な存在であることが内省されたとき感ずる、主体の心情としての「孤独感」は、主観的認識によるものである。約言すれば、主観・客観にまたがる、主体の心身のこのような状態を、「つれづれ」とよんだものと見ることができる。前々号・前号に述べたところを参照して、以上を要約するとつぎのようになる。

つれづれ
- ①主体の状態（㋑孤独 ㋺閑暇・閑散・無事）
- ②主体の心情（㋑孤独感 ㋺退屈・倦怠・無聊）

一方、「はかなし」はどうであるか。この語はもともと「はか」と「なし」の結合によって生まれたものと思われ、さらにその「はか」は、「はかる」から出た名詞形としての「はかり」の下略と考えられる。まず「はかり」はたとえばつぎのように用いられる。

……けしう、心おくべきこともおぼえぬを、何によりてかから

むと、いといたう泣きて、いづかたに求め行かむと門に出でて、と見かう見、みけれど、いづこをはかりとも覚えざりければ、かへり入りて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我や住まひし

伊勢物語二十一段の一節である。「いとかしこく思ひかはして、異心」のない夫婦がいたが、「いささかなることにつけて、世の中をうしと思ひて」、出ていった女のあとを追おうとしたが、行くえが知れず途方にくれている男の様子を描いたものである。ここの「はかり」は「メアテ」「アテド」の意で用いられ、尋ねて行こうにも、どこを目あてとしてよいやら、わからなかったので、ということになる。寛平御時后宮歌合の恋の部に、

かけてれば千々の黄金も数知りぬなどわが恋の逢ふはかりなき

という歌が見える。この「はかり」は、「メアテ」「アテド」の意ととってもよさそうであるが、むしろその転義としての「工夫」「テダテ」の意とする方が適当であろう。ところが、同じ歌合の冬の部にはつぎの歌が入っている。

我が宿は雪ふる野辺に道もなしいづこはかとか人のとめこむ

この「いづこはかと」は、後撰集恋二に入る中将更衣の歌の「いづこをはかと」を参照すれば、音数律の関係から「を」を省いたものと見られるものである。この「はか」はどちらも「メアテ」「アテド」の意である。

このように見てくると、「はかなし」は、「メアテ」「アテド」のないことを意味し、明らかに主体の志向する対象の存在しない状態をあらわすことばであることがわかる。主体の志向する対象の空無なる状態——これが「はかなし」の第一義である。主体の心情においては、たがいに相通う要素を持ちながら、主体の志向すべき対象を最初から持たない「つれづれ」との根本的な相違が、ここに見られるのである。対象の空無は、人間をもふくめた生物の場合は死滅を意味し、それを生死流転の相においてとらえると無常・迅速となる。このような対象の状態は、主体の心情に反映して、空漠感・無常感、さらには寄るべなさ・張合いなさ・頼りなさ・心細さなどを呼びおこすが、このような心情は、逆にまた対象へも影響して、不確か・弱小・軽微・幼稚なものをも「はかなし」とするにいたる。そして、右のような主体の心情が、観想にまで抽象されると、そこに思想としての無常観の成立を見ることになるわけである。以上を要約するとつぎのようになる。

はかなし
- ①対象の状態（㋑空無・死滅・無常・迅速 ㋺不確か・弱小・軽微・幼稚）
- ②主体の心情（㋑空漠感・無常感 ㋺寄るべなさ・張合いなさ・頼りなさ・心細さ）
- ③主体の観想（無常観）

ところで、「はかなし」の③に相当するものが、「つれづれ」にもあるかというと、それはないというほかない。ありようがなかったのでもあろう。主体が、何かの折に、自己凝視によってみずからの「孤独」に気づくとき、たちまちにして深淵のような「孤独感」におそわれることについては、前にも書いた。このような、人間存在の根源にかかわる心情としての「孤独感」を、一個の観想にまで抽象するのは不可能のことに属するのであろう。私にはまだ、この間の事情を明快に説明することが困難であるが、少なくともその方向

へ発展しなかったことだけは明らかである。その代り（といってよいかどうか分らないが）、「つれづれなるままに……」という慣用句が示しているように、「つれづれ」にまかせて、なにらかの行動に出ることによって、その「つれづれ」をなぐさめ、まぎらしていった。その行動としてはさまざまなことがありうるわけであるが、王朝においては、たとえば詠歌・物語・奏楽・双六遊び……などがあり、和泉式部のように恋愛までも「つれづれ」をまぎらすためのものとする人もあった。逆にいえば、なにらかの行動に出ることによって、なぐさめ、まぎらされるものが、「つれづれ」であったということもできる。

これに反して、「はかなし」はまぎらしようのないものであった。このことは、「はかなし」の第一義が、対象の客観的状態をあらわすものであるところからきていると考えられる。まぎらしようがないから、対象の空無・無常な状態を、そういうものとして如々に観る態度がつくられてゆく。一種の諦観がそこから生まれる。それが無常観であった。（この項終り）

（本学教授）